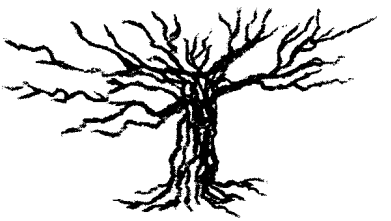
自叙伝旅行

安岡章太郎

自叙伝旅行

安岡章太郎



文藝春秋

自叙伝旅行

昭和四十八年五月一日第一刷

定価　八五〇円

著者　安岡章太郎

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三番地
電話（〇三）二六五―一二一一

印刷　凸版印刷
製本　加藤製本

万一落丁乱丁の場合はお取替え致します

© Shōtaro Yasuoka 1973

0095-332600-7384　Printed in Japan

自叙伝旅行

アート・ディレクター　翠屋　充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

自叙伝旅行

ウナジお前も枯れススキ――《市川》 9
〝ああ戦いの焼き栗……〟――《京城》 35
やり・へら・にっこ――《弘前》 79
墓地の〝自閉症〟――《青山・渋谷・上目黒》 119
家屋の亡霊――《代田》 153
巷に雨のふるごとく――《金沢・粟津》 175
にいしい米を食べたい――《身延山》 191
わが家のチミモーリョー――《高知》 209

私の戦中史

「のらくろ」と共に——241
「認識不足」の劣等生——259
小愛国者の期待と失望——275
敗北の予感——287
似あわない帽子——303
迂遠な行路——319
あとがき——337

自叙伝旅行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ウナジお前も枯れススキ――《市川》

私には、はっきりとこれが故郷だと言えるところがない。これは私に限らず、いま大都市に住んでいる人の過半数は、おそらく私と同様であろう。

しかし、故郷とは一体何なのか？　遠きにありておもうもの、などというのはおそらく明治時代までのことで、いまの私たちには故郷とは単なる概念かマボロシである。このマボロシを見るために、眼をつむる。すると大抵、茫漠と眼蓋を横切るのは、何か白茶けた水の流れる川である。

私の母の実家は高知県の、鏡川という川原に面した、築屋敷というところにある。しかし、この川は私には縁遠い。私が、いま住んでいる東京都世田谷区尾山台の家の近くには、多摩川が流れている。しかし、これは無論、故郷ではない。すると、この川は、私が大正十五年、満

五、六歳の頃、朝鮮京城に移るまで住んでいた市川と、小岩の間を流れる、江戸川ということになる――。

じつは比較的最近知ったことだが、私は故郷ばかりではなく、年齢も多少怪しいところがある。大正九年五月三十日生れは戸籍上のことで、本当は四月十何日とかの生れだというのである。いや、ことによると三月十何日かな、ともいう。すでに私は父も母も亡くしたし、兄弟はもともとないから、問い合せようがない。どっちにしろ、べつに大した違いはないようなものの、当人の私にとっては何となく人生の出発点から誤植の宿命を負っているようで、現在の私が何処か好い加減な人間で、ゴマ化しの性癖があるのも、このへんに最初の原因がありそうな気もする。

先日、ひさしぶりで、いま市川に住んでいる叔母を訪ね、私の誕生日は本当のところ何月何日か、と訊くと叔母は言下に、

「それは四月の十九日よ、わたしは女学校からかえると毎日、姉（つまり私の母）の入院している病院に『いつ赤ん坊が生れるか』と訊きに行かされ、姉には『そんなに毎日せつかれたって生れるものか』とドクづかれ、板バサミになってほとほと困ったから、よく憶えている」

とこたえた。そして私が生れると、叔母は私の父宛に電報を打ちに行った。そのときの父の住所は、東京府下南葛飾郡小岩村、であったという。

どうせ、病院でお産をするくらいなら、母はわざわざ高知までかえる必要はなさそうだが、これはどうやら私の生年月日のアイマイさとも関連がある。母は、大学生だった父のところへ嫁に来た。父は東大の獣医学部（いまの農学部畜産獣医学科）を卒業すると陸軍に入ったが、任官前の結婚は許されていなかったので、それは隠していたらしい。したがって、母の出産も東京では具合が悪く、私の出生届も父の任官後十カ月以降が日付になった。

とにかく私は、生後二カ月ぐらいで、小岩へ連れて来られた。当時、高知は四国の他の県とは何処へも汽車は通じていなかったので、小さな汽船で神戸か大阪へ渡る他なかったから、ひどく時間がかかり、赤ん坊を抱いた真夏の長旅に大層難儀した――、とこれは後年、母からたびたび聞かされた。

言われてみると私は、生れて間もなくの頃の自分が体中アセモと油煙だらけになりながら、汽車や船や人力車などを何べんも乗り換えて、おそろしく長くて退屈な旅行をしたような気もする。これは勿論錯覚だとしても、眼を覚ますと何処かで汽笛やレールの音が響きつづけているような心持になるのは、乳幼児期の記憶かも知れない。

大正十二年、関東大震災のときは、たまたま父の転任で四国の善通寺にいたから、私は震災にはあわなかった。善通寺から戻ると、私たちはまた小岩に住み市川に移った。つまり私は生れてから五年間ばかりは、善通寺滞在と四国東京間の何度かの旅行を除くと、あとは江戸川をはさんで市川と小岩を転々としていたことになる。マブタの裏を江戸川が流れるわけだ。

私には、しかし小岩の町の記憶は、ほとんどない。かろうじて印象にあるのは、近所に年上の大工か何かの子供がいたことだ。その子と一緒に江戸川べりの舟着き場で、川岸の棒材を叩きながら、「ストトン節」を歌っている場面だけが、どういうものか私の頭の中のスクリーンに映っている。

当時、どんな家に住んでいたのか、家の中の記憶はまったくないのに、こんなことだけを憶えていることはおかしいので、おそらくこれは後年、母かだれかに聞かされた話から逆につくった想像だろう。前述の叔母の話では「枯れススキ」もまた当時の私の愛唱歌で、次のように歌っていたという。

「おれは河原の枯れススキ
ウナジおまえも枯れススキ」

叔母が、ウナジではない、おなじだ、と何度教えても、私は頑として、ウナジおまえもだよ、と主張しつづけたというが、同じのオをウのように発音することは、四国や関西にはあまりないようにおもう。それは関東の、葛飾あたりの、青バナをたらして、しょっ中、鼻をつまらせている子供の、ジャリ舟をつないだ川べりや土管の並んだ草原で、声をハリ上げている顔が何となく眼に浮かび、歌の文句にも似つかわしい。

小岩から市川へ引っ越したのは、いつ頃のことか、とにかく私は市川で二年保育の幼稚園の一年目をすませたぐらいだから、この頃からは記憶もかなりハッキリしてくる。市川へ来て何よりも、急に明るくセイセイしたところへ出て来たという印象がある。これは小岩が当時から、よほどゴミゴミした、薄暗い感じがしていたからでもあろう。けれども、市川が明るかったのは、他にもいろいろの理由がある。

借りた家は、まだ建ったばかりで、もう一軒、同じ家主の借家が庭つづきに並んでおり、Sさんという醸造技士の若夫婦が住んでいた。私の両親も、まだ三十になるかならずの年代で、一人息子の私もようやく手が掛からなくなって、Sさんと私の家とは、年じゅう合同でカルタ会をやって遊んでいた。無論、私にはまだカルタは取れっこなかったが、夏の夜、どちらかの家の座敷に両方の家族が集まって、歌を詠み上げながら、バンバンと景気よく、カルタを飛ば

したり畳を叩いたりする音が、笑い声と一緒に、家の外まで響き、パーッと明るい灯が庭先きに溢れ出しているのが、子供の私にも愉しかった。

Sさんの家には子供はなく、近所で私の遊び相手になってくれていたのは、向いにあった大家のSKさん家の二人の姉弟だった。といっても下の男の子さえ、もう中学の一年か二年で、幼稚園の私には大き過ぎる兄さんだったが、絵が上手で私によく絵をかいてくれたり、チャンバラの刀をつくってくれたりした。おかげで私は幼稚園で絵の成績が大へん良く、母はその絵をSKさんの家へ持参して、礼を言い、自分の息子の自慢をした……。しかし私は、その恩のある弟さんの名前はハッキリと憶い出せないのに、姉さんの名は明瞭に頭に残っている。タカコさんといって、近所で評判の美貌で、学校も府立第一高女で一番だということだった。

私は、この姉さんの誇り高き女学校の制服姿はあまり憶えがないが、自分が近所で遊んでいるところをこの姉さんが迎えに来てくれたり、一緒にお使いに連れて行ってくれたりすると、何ともいえず嬉しい心持になった。それ故、私は、「タカコさん」といえば、夕暮れどきにそれだけでポッと白い花が咲いてホホエミ掛けてくれるような、そんなものが胸の中で開くような想いが、後々、相当の大人になりかける頃までしていた。

SKさんの、小母さんも優しい人だったが、小父さんの方は少し怖ろしかった。退役の陸軍

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c